
フェアリー・カカオ

夢石スイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリー・カカオ

【NZコード】

N7463Q

【作者名】

夢石スイナ

【あらすじ】

突如目の前に妖精が現れた。その姿は
で書いた2作目の短編作品。

お題「チョコレート」

「私はカカオの国からやつてきた、チヨコ妖精よ！」

突然、お子様向けアニメのキャラクターが言いそうなセリフが耳に入つた。

俺は別にテレビをかけているわけではない。突然目の前の人人が現れたのだ。

それは『妖精』というイメージを覆すただの中年のおっさんだった。

おっさんはにこやかな表情でこちらを見ていた。

俺はあまりの出来事に一瞬、固まつてしまつた。

「……だ、誰かー！ 不法侵入者です！ 警察を！」

「ちょっと、やめてくれ！」

おっさんは先ほどのかすれかすれの甲高い声から一般男性の低音声になつて、俺を止めに入つた。

「勝手に人の家に入つてきて、何言つているんだよー。」

「私は君のチヨコから出てきたんだよ？」

と、また急に高い裏声に変えて答えるおっさんだった。
事の発端はこうである。

「直樹くん。はい、これ

「え？ え？」

俺はクラスの女子、池谷みことに屋上へ呼び出された。

そこで、池谷は照れくさそうに何かの包みを渡してきたのだ。

一年に一度のイベントを覚えている俺は、大体の状況は把握していた。

よりもよつて、全く好みじやない女子からプレゼントを貰うことになるとほ。

「俺甘いもの好きじゃな……」

と、言い終わる前に、池谷は俺の手に包みを握らせ、走り去ってしまった。

そう、今日は年に一度のチョコの日。バレンタインデーであった。

屋上には俺と、手には紫色の包みだけが残った。

ショウがなく貰ってしまったが、学校のゴミ箱に捨てかねと思つた。

だが、あの池谷の不気味な顔を思い出すと、なんとなく呪いがかかりそうな気がしたので、家に持つて帰つた。

包みを開けてみると、案の定チョコレートが入つており、手作りののか若干いびつなハート型をしていた。

やはり捨てようかと思つたが、何気に俺は甘党だったりする。

普通は嫌なやつからもらつたものなんて食べないが、好奇心から一つ食べてみるかと、口に運んでみた。

だが食べた瞬間、口から勢いよく、煙が噴出したのだ。

「うお！…」

咳き込み、涙目になりながら俺は後悔した。

まさか、俺をハメるためにわざわざこの日バレンタインデーを選んだのか？

これはやられた。とてつもなくやられた。

そして田を開けると、そこにはチョコ妖精と名乗るおつさんが居たわけである。

「んで、おつさんあんたなんなんだよ

「おつさんじやなくてチョコ妖精よー」

おつさんは胸を張り、言い張つていた。

「もういいよそれは。で、なんで家に侵入してるわけ？」

「侵入じゃない、召喚されたんだ」

自分では召喚という言葉が格好良いと思つて居るのかよく分から

ないが、自信たっぷりな表情に見えた。

「あーなんかよくわかんね」

いきなり自分の部屋におっさんが来るって事は、もしや親父の客なのかと思ったが、考え直した。

こんな変なおっさんを客に迎えるほど俺の親父は変人だったか？ そんな事を考えているとおっさんは話を切り出した。

「直樹くんにはみことちゃんと結ばれる運命にあるんだ」

俺は突然のおっさんの発言に驚いた。何故、俺と池谷が結ばれなくてはならない。それに、何故池谷みことのことを知っているんだ？

「おっさん、もしや池谷の親父さんだつたり？」

「違う違う。私はチョコ妖精だといつているだら」

だんだん口調が普通のおっさんになっていく、チョコ妖精と名乗るおっさん。

全く状況が把握できないので、とりあえず話を聞くことにした。話によるところ「妖精は愛のキューピッド的存在であり、バレンタインデーに現れるらしい。愛情込めたチョコレートに宿る妖精で、俺と池谷をくつつかせたいようだ。

「みことちゃんのこと好きになつてくれ」

「無理」

俺は即答した。

「何故だ！ 確かに彼女は頭も悪いし、時間にルーズだし、短気かもしれない」

「あ、そうなの？ 知らなかつた」

「でも君を思う気持ちは誰にも負けないはずだ！」

「そんな事言われても、好きじゃないものは好きじゃないし。それ」

「それに？」

「キュー・ピッヂってのはお互いが知らない間にこつそり手助け

してやるものだ。愛つていうのは誰かが強制するものじゃない。」
そして俺は一息ついて言った。

「愛は自然と生まれるものだ」

その言葉におっさんは何か衝撃が走ったかのような顔をした。
そして、そうかと納得したかのようにつぶやいた。

「分かつたなら帰つてくれ」

「よし、君が望むなら私は影ながら応援するが…」

「え？ 応援しなくていいって…！」

「ではわらばだ！」

「おい、おっさん！」

なんだかよく分からぬいが、おっさんは帰つていった。
俺は安心して、いつも通りの夜を過ごした。

翌日、学校に行くとおっさんの影がチラチラしているのがウザくてしうがなかつたのはいつまでも無かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7463q/>

フェアリー・カカオ

2011年10月8日17時45分発行